

不合理ゆえの永遠平和一埴谷雄高『標的者』 基礎研究

田辺, 友祐

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of
graduate studies

(巻 / Volume)

59

(開始ページ / Start Page)

174

(終了ページ / End Page)

168

(発行年 / Year)

2007-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002945>

不合理ゆえの永遠平和

― 埴谷雄高『標的者』基礎研究

人文科学研究科 日本文学専攻
博士後期課程三年 田 辺 友 祐

はじめに

嘗て「政治と文学」論争なるものがあつた。内容や帰趣はともあれ、多くの文学者を巻き込んだ大きな論争であつた。埴谷雄高は、この論議には参加していないが、多量の政治評論を発表した時期がある。創作にも独自の政治思想を織り込んだ作品があり、作家の文学世界に奥行きを与えている。その一つの『標的者』は、『総合』一九五七年八月号が初出である(注1)。のちに短篇集『虚空』(現代思潮社)の一九六〇年版に所収されたが、一九七一年に刊行が始まった『埴谷雄高作品集』(河出書房新社)には収められず、『虚空』の新装版(一九九〇年)の出版迄、実質的に長らく埋もれていた作品である。その後、『埴谷雄高全集』第四巻(講談社、一九九八年九月)に収録された。

本稿では、まず、先行研究や作者の自己解説を概観する。次いで、作品と文学理念や政治思想の関わりを問い、研究の基礎を整える。さらに、平和、敵、監視といった要素を中心に、作品の分析を進めていく。

一

管見によれば、『標的者』の同時代評は見当たらない。研究ではないが、雑誌掲載から三年後の吉本隆明「解説」(『虚空』所収)が、「極限までひっぱられた平和思想の世界」を描いたと指摘している。この「解説」で、『標的者』について触れ

た箇所は僅かである。『虚空』出版後も、研究の側が『標的者』に着目する頻度は極めて低く、埴谷雄高の研究書の嚆矢である白川正芳『埴谷雄高論』(書肆深夜叢書、一九六七年六月)でも、殆ど触れていない。同書では、「遁走の誘惑」の章で、二人の登場人物の喧いた「逆説的なユーモア」に焦点を当てている。しかし、作品の途中迄の粗筋を述べた部分が大半で、論としては展開していない。

『埴谷雄高評論選書2 埴谷雄高思想論集』(講談社、一九七三年五月)は、『標的者』の「序詞」のみを所収する。編者である立石伯「編集あとがき」は、この「序詞」について、次のように述べている。

さて、まず序において、私たちはのっけから宇宙の根源、ものの始源の様態を暗示されるであろう。極端にいえば、この詩的な独白は、人間による存在の開示という意味ばかりでなく、ことによると存在そのもののつぶやきではないのか、思考する存在の言葉がしるされているのではないか、とさえ思わざるをえないほどである。

立石伯「埴谷雄高著作解説」(『ユリイカ』一九七八年三月号)も、手短けではあるが、内容の核心を剔抉している。

「標的者」は、「戦争論のエッセイ」と自注がある。といっても、この戦争論は原子爆弾をつんだ人工衛星が飛びまわっている現在、近い将来に警告を

発したものとということすらできる。氏のエッセイのすぐれた所以である。いかえれば、このエッセイは上演不可能な戯曲なのである。救済でなく、地球、太陽系の全的滅亡をデウス・エキス・マキナとせざるをえない。「愚かし」と誰にも解ることを数千年も繰り返してきて自らとめることのできなくなってしまうた不思議な生物」である人類史のデッサンである。

河野信子「埴谷雄高の自在鉤」(『情況』一九九七年六月号)は、「暗黒物質」が光の源であるとする天文学の仮説を踏まえて、独特の見解を述べた。

大量死・精神界の荒廃・物財のとどまることのない浪費は、戦争のシステムを構成する要素ではあるが、実体を作り出す根源は、さらに奥深くに起因をもつて作動を開始している。それが「エッセイとしての戦争論」、「標的者」となった。

埴谷雄高の命日の上梓となった『埴谷雄高 標的者』(深夜叢書社、一九九八年二月)は、或る劇団が『標的者』を上演した際の台本を単行本化したものである。原作を忠実に辿りつつ、新たに大阪の一家族を付け加えた。同書の松田政男「解説 埴谷雄高と演劇」は、舞台の印象記として貴重である。この解説は、埴谷雄高の青年期に於ける演劇活動の概説と、「埴谷雄高を上方喜劇で異化する試み」(『図書新聞』一九九八年二月一四日号)の再録で成り立っている。ちなみに、戦前の埴谷雄高は、一九歳の頃に、「ソヴェトIIコンミュン」(または「ソヴェトIIコンミュン」)なる三部作の戯曲を執筆したとされるが、未完成に終わり、原稿も残っていないという(注2)。また、端役ながら、築地小劇場で幾つかの芝居に出演している(白川正芳『埴谷雄高の肖像』、慶應義塾大学出版会、二〇〇四年一月)。

以上のように、『標的者』の先行研究は少数であり、埴谷雄高研究の課題の一つであるといえる。この作品のみを対象にした論考は、皆無に等しいといわざるを得ない。

他に、作者の自己解説にも触れておきたい。

最後の『標的者』は雑誌「総合」で戦争についての特集を行ったとき、戦争論のエッセイとして書いたものである。新しい形式をもったエッセイを書いてみようとしたのであったが、創作欄に組まれてしまい、ここに収めるのはいささか場違いであるけれども、結局この短篇集に収録されるはめになつてしまった。

『虚空』あとがき

作者は、「戦争論のエッセイ」と見做しているが、表現形式は戯曲である。「左の階段へ降りてゆく」、「右の階段から降りてくる」といったト書きもある。そのため、創作欄への掲載となったのである。厳密に分類すれば、舞台での上演を前提としないところの、「レーゼ・ドラマ」(英語では「クローゼット・ドラマ」)である。

表現形式ばかりでなく、内容も関連付けて考えた場合、『標的者』とは、「論理と劇の婚姻」を目論んだ作品であるといえる。埴谷雄高には、「論理と詩の婚姻」(「論理と詩との婚姻——ドストエフスキ『悪霊』『群像』一九六二年六月号、または、「論理と詩の婚姻について——真継伸彦氏への返事——」『週刊読書人』一九六七年二月二〇日号)という考えがある。これは、断片集『不合理ゆえに吾信ず』を対象にした言葉だが、形式は戯曲で、内容は戦争論の『標的者』の場合、「論理と劇の婚姻」といい得るのである。『不合理ゆえに吾信ず』には、次の文言がある。「他に異なつた思惟形式がある筈だとは誰でも感ずるであらう」。

創作と戦争論の側面を併わせ持つこの作品は、極言すれば、「政治の優位性」を否定し、「文学の自律性」を補完する潜在力をも備えている。一九四六年に発生した「政治と文学」論争で、荒正人とともに議論の中心となった平野謙は、「文学芸術に『政治の優位性』を原理的に要請するのは誤り」であり、「文学と文学運動はどこまでも『文学の立場』から」(本多秋五『物語戦後文学史』、新潮社、一九六六年三月)行なうべきであると主張した。しかし、結論の出ないまま、論争は収束する。やがて、一九五六年二月に始まった「スターリン批判」によって、「戦後文学」が一貫して抱えていた「政治と文学」という二項対立の図式は、ここで崩壊したのである(栗原幸夫「あとがき」、栗原幸夫・埴谷雄高『埴谷雄高語る』所収、河合文化教育研究所、一九九四年九月)。埴谷雄高の評論「永久革命者の悲

哀』『群像』一九五六年五月号)は、同年二月以前に完成していたとされ、そのために「スターリン批判」の先駆者の一人と呼ばれるようになった。もつとも、『群像』の当時の編集長によれば、「どんなものであろうと、スターリン批判が一度なされた後の批判だから、世の注目を浴びるというわけにはいかなかった」(大久保房夫『終戦後文壇見聞記』、紅書房、二〇〇六年五月)という。『標的者』の発表は、翌年の一九五七年である。政治評論と文芸創作が融合した新形式の案出は、次の自説の実践でもある。

私は、現在でも、小説をひとつの手段としか考えていない。もし混沌たるなかでよろめく私の思考を十全にいれ得る容器があれば、私はその他の方法へいさぎよく飛びつくだろう。そんな私にとっては、私達の生と存在のかたちを写すものとしての小説の機能は殆ど魅力的ではない。

(「あまりに近代文学的な」『文学界』一九五一年七月号)

埴谷雄高は、小説以外でも、例えば、断片集『不合理ゆえに吾信ず』、『埴谷雄高準詩集』、『死霊』断章、散文詩『寂寥』、戯曲『標的者』といった多様な「容器」での表現を試みている。映画や政治の評論も多く執筆している。もつとも、『標的者』以後に小説を放棄したのではない。意識や存在、夢といった形而上学的要素の表現は、『闇のなかの黒い馬』や『死霊』などの小説作品が担い続けた。

二

この作品は、各章ごとに章題が付いている。順に、「序詞」「見慣れぬ飛行物体の内部」「公館の展望台」「平和会議場」「隠れた警察署」「地下兵器庫」「隠れた警察署」「公館の展望台」「終曲」から成る。最後の「終曲」の舞台は、「見慣れぬ飛行物体の内部」である。即ち、「平和会議場」を例外とすれば、「地下兵器庫」を折り返しにして、それ迄の舞台に逆行する構図である。

まず、内容について触れておきたい。

長い「序詞」には、無限や未出現、自同律などを主題とした五つの韻文(「暗黒

物質」「変化と無変化」「無表現の精霊」「水素原子」「茫漠としたもの」)が並んでいる。例えば、「いまだならざるものも／やがて現われる。／いまだこないものも／やがてやってくる」、または、「俺が俺であることの苦痛を／味わい知っているものは／俺のほか／誰もいない。誰もいない。／誰もいない」といった、埴谷雄高文学の骨子となる要素を列挙している。続く「見慣れぬ飛行物体の内部」では、異星人の「ミュー」と「ニュー」の二人が、宇宙空間の飛行物体のなかに、「奇妙な不安につつまれた生物」である「ガモン」を発見する。「公館の展望台」から場所が地球に移る。「第一人者」によると、「あらゆる兵が地上から消える歴史的な偉業の日を控えているという。既に、「兵員解除のいっさいの措置が完了」している。章の最後で、「空間研究所」の所長を兼任する「副官」へ、人工衛星らしき飛行物体の接近が告げられる。「副官」は、「平和会議場」にて、「標的者」の説明を始める。「ミュー」の命名した「ガモン」とは、本来は、「医師」によって、「全国から集められたあらゆる種類の標的マニヤからひとりの射撃の名手を基調にして合成された産物」であった。その名前が「標的者」である。「標的者」は、地下武器庫の弾丸を「自動的に遠隔操作」出来るという。会議の参加者からは、否定的な意見が出るが、「医師」が説得を試みる。「隠れた警察署」にて、「副官」が「署長」に独自の戦争論を述べるが、反駁に合う。短い断章の「地下兵器庫」で「副官」は、「標的者」が「自己自身を標的として打ちおとす」計画を独り言つ。再び「隠れた警察署」に戻ると、指令の失敗が報告される。「公館の展望台」で、「副官」と「第一人者」が短銃による決闘を行ない、事実上の相打ちとなる。最終章の「終曲」では、飛行物体に乗る「ミュー」と「ニュー」が、地球が大量破壊兵器で滅亡したと確認し、「標的者」の捕獲を決定する。ここで作品は終わる。

三

一九五七年に、一頭の大を乗せた人工衛星の打ち上げが成功する。人類初の宇宙飛行が実現したのは、一九六一年である。埴谷雄高には、宇宙時代の到来を期待する文章が多いが、一方で、危懼や批判を表明した評論もある。「人工衛星という偉大な科学の勝利の反面に、なお戦争と貧困という人類の愚劣が、さながら私達の視界を横切るロケットとキャップのごとくに随伴して走っている」(「戦争と

貧困をひきつれて』『讀賣新聞』一九五七年一月二八日夕刊)。宇宙関連の文章が政治的な意味合いを含んでいるのは、当時盛んに執筆していた政治評論の延長であろう。

『標的者』にみられる政治思想にも、それまでに発表した政治評論が如実に反映している。例えば、「政治をめぐる断想」(『近代文学』一九五一年二、三月号)に、「恐らく政治の体系に於いて最も微妙な部分を占めるのは、支配者の位地と心理である」(注3)とある。この作品には絶対的な支配者はおらず、実質的な最高指導者である「第一人者」は、「副官」から、「退屈のなかにまどろんでいるいっさいに無能な政治家」と規定される人物である。ここに、埴谷雄高の政治家観の一面が窺える。また、前掲の「戦争と貧困をひきつれて」では、「現代の戦争は、一人の敵とその相手が互いをながめあつて戦う事態から、見えざるところで行われる戦争へ次第に発展した」と断定し、さらに、「指揮者は現場を見ないどころか、原爆投下のごとく、当事者する相手を見なくなった」と指摘している。『標的者』もまた、そのような「見えざる」戦争を描いた作品である。

最も重要な登場人物の立場が「副官」となっているのは、軍の責任体系の曖昧さを示している。副官とは、「軍隊で、司令部・部隊の長官を助け、事務を取り扱う武官」(『新明解漢和辞典』三省堂)である。『標的者』に於ては、軍事の「直接の責任者」という役割を担っている。埴谷雄高が、「階級社会の最も端的に整理された縮図は軍隊である」(『指導者の死滅』『中央公論』一九五八年七月号)と見抜いたとおり、軍隊の階級は堅固であるにも関わらず、しかし、最上位の者が最終的な責任を免れる仕組みがここにある。即ち、責任者と指導者の棲み分けが明確なのである。戦時下ならば、前者は戦場の前線で過ごし、後者は安全な後方地帯で机上の空論を繰り広げるであろう。「副官」の直属の上司は「統合本部長」だが、「公館の展望台」で僅かに登場するのみで、以後の章には姿を見せない。「第一人者」もまた、国家元首ではなく、公的立場の不確かな為政者である(『埴谷雄高 標的者』では、「第一人者」という呼称は用いられず、米国と思しき国の「ホワイトハウス」で執務をする「大統領」となっている)。軍への影響力も不明である。このような支配機構は、「無責任の体系」(丸山眞男「軍国支配者の精神形態」『潮流』一九四九年五月号)の一言に尽きる。「仮装敵国」側にも、それぞれ「第一人者」「統合本部長」「副官」が在るとされ、階級社会の縮図や空疎な体系の存在を示唆している。

「敵」……この言葉ほどあらゆる歴史を通じて屢々使用されてきた言葉は他にないだろう(『敵と味方』『中央公論』一九五九年二月号)とあるように、『標的者』の中心概念の一つが「敵」である。「ミュー」と「ニュー」の搭乗する「見慣れぬ飛行物体」が「標的者」に接近した様子を、仮想敵国の人工衛星の追跡ではないかと「副官」は誤解してしまう。仮想敵国の設定について、次のような考察がある。「悲しいことに、部族や国民の大多数は、ある程度、計画的に敵をつくることによって、社会的連帯感と集団への帰属意識を得ている」(サム・キーン『敵の顔 憎悪と戦争の心理学』佐藤卓己・佐藤八寿子訳、柏書房、一九九四年一月)。「標的者」に一般市民は登場しないので、かかる連帯感や意識は確認出来ないが、少なくとも、「副官」ら指導者層の一部は、幻の敵という紐帯を有している。一方で、「副官」と議論した「署長」は、「相手がこちらを敵と呼べば、たとえその相手がきのうまで見知らなかった相手にせよ、たちまち鸚鵡返しにその相手をまた敵と呼んでしまう対応心理」が、戦争の勃発する条件の一つであると冷静な認識を述べる。のちにこの意見は、埴谷雄高に於ては、「やつは敵である。敵を殺せ」(『政治のなかの死』『中央公論』一九五八年一月号)という文言に集約される。さらに、「署長」は「副官」を、「月夜の影に怯えた犬」に譬えて婉曲に批判する。いわゆる「ゴースト・ストゥップ事件」(注4)を持ち出す迄もなく、軍隊と警察の関係が垣間見得る対話になっている。ちなみに戦時下の埴谷雄高は、同時期に憲兵と特別高等警察の監視を受けており、双方の間柄を体感していた。既に特高が訪れていた自宅に憲兵も足を運ぶようになったために、「特高が怒って、なぜ憲兵隊が特高の領分を侵すんだといって、特高がこれにおれに同情してくれるんだよ(笑)」(大岡昇平・埴谷雄高『二つの同時代史』岩波書店、一九八四年七月)と回想している。本心からの「同情」ではなからうが、滑稽な逸話である。このような二重の監視は、敗戦とともに終わる。憲兵と特高もまた、個々人の行く末はともあれ、組織としては瓦解した。もっとも、「専制国は少なくなったが、しかし、憲兵がいなくなったわけではない」(『指導者の死滅』)という指摘は、いまもなお有効である。

さて、「標的者」創設の理由である仮想敵国とは、大義名分に過ぎない。逆にいえば、仮想敵国なくしては、「標的者」は存在意義を失う。最終的に自らを標的と

して狙い続けるのは、杓子定規の枠組みから逃れられない悲劇でもある。『死霊』の言葉を用いるならば、「一つの観念の幅から通れられない」(一章 状態にある。そもそも「標的者の原型」は、「精神病院からつれられてきた」という。さらに「医師」は、「あることに熱中する人間の部分だけをとりこしてゆく手術を行ない、先述のように、原型を土台にした合成物を作成するに至る。この箇所は、M・シエリーの第一作を彷彿とさせる。或いは、精神的な要素を別とすれば、「標的者」とは、「回天」のような人間兵器と同じ発想にあると考えられる。人権は顧みられない。作品内には、「標的者」計画の手術に携わった「医師」を、「人間自体を苛酷な目的に向かって変造した」と批判する人物がいる。これは、一登場人物の意見というよりは、作者の肉声に近い。医学と軍事の密接な関係について、次の意見が参考になろう。

日本の厚生省は、一九三八年内務省衛生局が独立するかたちで成立したが、その最初の仕事は前述の国民優生法の起草であり、実質上の初代厚生大臣は化学戦(毒ガス戦)の生みの親である小泉親彦(東条内閣)であった。発足当初からのこのような厚生省の人命軽視の体質が、戦後の薬害エイズ事件における意図的情報操作(情報隠し)や血友病エイズ感染者への人権無視の態度へとつながっていることは否定できないであろう。

(小俣和一郎『精神医学とナチズム』、講談社現代新書、一九九七年七月)

ところで、近代日本は、「人々の日常に監視と支配の網の目を張りめぐらせた警察官僚国家であった」(松浦寿輝『明治の表象空間』第一回、『新潮』二〇〇六年一月号)とされる。『標的者』の舞台となった国や時代は断定出来ないが、人体実験の産物である「標的者」は、その国を「不意に攻撃するかもしれない攻撃物に対してつねに監視している」。それ以外にも、「地球は約三十の人工衛星によって監視」を受けているという。地表にも、「あらゆる場所に自動装置」が張り巡らされている。作品内に具体的な説明がないが、監視用の撮影装置であろう。「副官」もまた、「世界を写す魔法の鏡の部屋」と称される「隠れた警察署」の「署長」の偵察を免れない。しかし、対象人物の言動を把握しつつも、事前に行動を防げなかったところに、「自動装置」及びそれを管理する組織の能力の程が滲み出ている。

前述のように『標的者』は、作者によれば「戦争論のエッセイ」なのだが、監視社会の危険性をも描いていたのであった。「標的者」を製作した「医師」さえも、「深夜目覚めて、私がつくりあげた標的者が頭上の暗黒の高い空間にいまも眠らずにいるとふと思ひ浮かんだとき、私もまた次第に不眠になってきたのです」と吐露している。ひねもす見続けられる不安や緊張感が原因であろう。見方を変えれば、自らの創造物に悩まされ、さらに、医者でありながら不眠症になってしまいう二重の諧謔になっている。

「攻撃物」を探知した「標的者」は、迎撃を続ける。ここから内容が急転直下する。作品は、或る一日の出来事を描いている。その日は本来、「あらゆる兵が地上から消える歴史的な偉業の日」の直前であった。即ち、カント『永遠平和のために』に於ける常備軍の廃止という主張を、さらに前進させた考えが実現する筈であった。微に入り細に穿って解釈するならば、確かに「地上」の兵力の全廃には成功したといえる。ちなみにカントは、『純粹理性批判』にて、「哲学の義務は、誤解から生じたまやかしを除くにあった」(篠田英雄訳)と述べている。『標的者』の世界は、「誤解から生じたまやかし」を除去出来ず、自縄自縛に陥る。とどのつまり、「あらゆる兵」ばかりでなく、文民さえも「地上から消える」日になってしまった。ボードレール『巴里の憂鬱』にみられる悲痛な叫びである、「どこでもいい、どこでもいい……ただ、この世界の外でさえあるならば!」(三好達治訳)が、この終局に相応しい。白川正芳『埴谷雄高論』は、決闘前後に「副官」と「第一人者」が述べた「逆説的なユーモア」には、悲哀も該当すると指摘した。「副官」が例示した、「誰も地上へ現われない日にわざと灼熱の展望台へ上がってみる」といった文言が、それに当たる。平和利用のための装備が引き起こした結末もまた、悲哀に満ちた「逆説的なユーモア」である。

おわりに

自らを標的にした「標的者」。その指令を下した「副官」。「標的者」を捕らえようとすると「ミュー」と「ニュー」。いずれも愚劣である。人類の「救済でなく、地球、太陽系の全滅」(立石伯「埴谷雄高著作解説」)への道は、一直線である。ところで、「ミュー」はミュー中間子を想起させ、自然崩壊する命運のもとにある「

(河野信子「壇谷雄高の自在鉤」という。「ミュー」は、「標的者」を「ガモン」と名付けたが、字引『リダーズ英和辞典』(研究社)で、「ガモン」と発音する単語「gammō」の意味を調べると、名詞では「たわごと」でたため、瞞着、ごまかし、感嘆詞では「ばかな!」であった。「とめどもない繰り返し」がガモンの見事な属性になっているという「ミュー」の指摘は、「愚かしいと誰にも解ることを数千年も繰り返してきて自らとめることのできなくなってしまうた不思議な生物」たちにも該当する。さらには、「ミュー」自身にも当てはまる。

或る座談会で、壇谷雄高は次のように述べている。

地球が死滅した後、太陽系が死滅した後、宇宙人が来たときに、かつて人間というものがいて、何かやっていたということを知る。ビルディングがあった。人間は何か書いていた。哲学もやっていた。哲学は宇宙とか人間についてもよく論じていて、それを見たら、人間もだいたいわかった。けれども、小説をみたら、わからなくなつた。こんなものが宇宙にあるのかしらと驚く。そういうものが書かれてないとだめでしよう。宇宙人が初めて会つたといううようなもの。それがぼくの小説論。

(河合隼雄・鶴見俊輔・壇谷雄高「未完の大作『死霊』は宇宙人へのメッセージ」『潮』一九九〇年一〇月号〜十一月号)

「全的滅亡」後の世界に対する壇谷雄高の想像力は、両義的である。人類にとつての地球滅亡の受け止め方とは異なり、宇宙人にとつては斬新な発見の契機になり得る。その可能性の是非は問わないとして、頗る独特な見解である。独特といえ、座談会の出席者の一人が、別の場所で、以下のような指摘を行なっている。

壇谷雄高の政治思想は、ハッピー・エンドへの期待をもたない。そのことが、明治以来の日本の政治思想史の中で、この人の政治評論を、独特のものにしている。

(鶴見俊輔「壇谷雄高の政治観」『壇谷雄高作品集』第三巻解説、河出書房新社、一九七一年六月)

他の箇所では、「幸福な結末への期待をもたないことは、壇谷雄高の精神の故郷ともいべきもの」であると断言した。政治評論と同じく『標的者』もまた、先述のように、「ハッピー・エンド」ではなく破滅的な示唆とともに閉じている。そればかりでなく、平和実現への多難、仮想敵の存在、監視社会の危険性などを提示した。「代案というのは非常に難しく、お前たちが自分で考えるということですね」(『壇谷雄高語る』)という持論のためであろうか、解決方法は示していないのだが、偽りの平和への戒めにはなり得ている。軍備の力による平和は、決して訪れないのである。作品の外側に踏み出して解釈するならば、「社会革命」から「存在の革命」へと向かう筋道の模索を描いたといえよう。社会制度の改革では表層の変化に過ぎないため、人間の存在自体を変える窮極の方法である。作者の言葉を借りるならば、「存在への隷属の完璧な顛覆」(『死霊』五章)を目的としている。『標的者』には、「存在の革命」に繋がる要素は見られず、未だ前段階にある。しかし、過渡期の混沌を、やや誇張した内容ではあるが、犀利な筆致で表現し得た。

『死霊』や『闇のなかの黒い馬』は、「自分が置かれているこの現実の直接的反映を私が構築した世界のなかへ持ちこまない」創作方法である「還元的リアリズム」(『近代文学』一九五五年五月号)のもとに描かれている。『標的者』も、具体的な国名や人名を用いておらず、「現実の直接的反映」と思しき事象もみられない。だが、将来、この作品のような惨状に見舞われる可能性を、否定出来るであろうか。未来を予見した作品、と見做すのは大袈裟であるにしても、しかし、大量破壊兵器の開発や世界各地で相次ぐ戦争は、人類や地球を「全的滅亡」に導く危険性を有している。

最後に、再び丸山眞男「軍国支配者の精神形態」の言葉を引いて、稿を閉じたい。

これは昔々ある国に起つた御伽話ではない。

(注)

1 『標的者』からの引用は、『壇谷雄高全集』第四巻を底本とした。その際、拗音と促音

は大文字に改めた。

- 2 「ソヴェトIIコンミュン」の内容を、作者は次のように述べている。「その題名の示すごとく、ソヴェトなるものは、パリコンミュンの貴重な経験がロシア革命で生き返った事態であるということを示す三部作で、その第一部では、ウクライナにおけるマフノの活動「を貧しい農民の集団のなかのさらに最底辺にいる一浮浪少年を通じて扱い、その第二部では、クロンシュタットにおける反乱を、いわば放恣と自由のあいだの見分けなどつかないほど絶えず流動的な水平の側における火のごとき集団と、鋳型のごとき堅固な枠を絶えず設定しようとする志向をもったベトログラード、ソヴェトの側の固定的な集団との対立として扱い、そしてその第三部では、アメリカからやってきたアレクサンダー・ベルクマンとエマ・ゴールドマンのコミンテルン退場後における党の一元性、換言すれば、アナキストの革命への協力がまったくゼロの空虚となってしまったあとの五カ年計画のなかにおける〈国家〉の確立ぐあいを扱ったものであった」(『影絵の世界』、筑摩書房、一九六六年十二月)。

要約すると、「ロシア革命のなかに於けるアナキストの歴史を纏めようとしたのである」(「永久革命者の悲哀」)。

- 3 「政治をめぐる断想」からの引用は、『壇谷雄高全集』第一巻を底本とした。引用文中の「位地」は、講談社文芸文庫版『壇谷雄高評論選書1 壇谷雄高政治論集』でも同様の表記である。他の文章でも、例えば、政治評論「指導者の死滅」にて、「位地」を用いている。「地位」の倒置かと思われるが、独特の用字である。

- 4 一九三三年に大阪で、信号無視の兵卒と、それを注意した巡査の間に小突き合いが生じた。軍は責任転嫁し、軍人に対する侮辱であると抗議する。さらに兵卒が巡査を訴えるが、五か月後に調停に至る。「どうでもよい事件をめぐって、軍は居丈高に自己の存在と威信を見せつけようとしたのである」(戸部良一『日本の近代9 逆説の軍隊』、中央公論社、一九九八年十二月)。